

五雲会

平成二十九年十月十四日(土) 正午(始)

演目の解説

能「枕慈童」(まくらじどう)

魏の文帝に仕える臣下が、勅命により薬の水の源を尋ねて山中へ分け入ると、菊の咲き乱れる場所です。不思議な慈童に出会います。臣下が訝しく思いその存在を疑うと、慈童は周の穆王に仕えたといひ、慈童は八百年も昔の存在と云ふので、さらには何れも書かぬ水を取らねばと云ふので、法華経の二句の偈を書き添えられた枕を賜つており、この妙文を菊の葉に写してその露の水を飲んで不老不死となつたことを告げ、長寿をもたらした枕を讀み、帝に祝福の言葉を書き添えて舞を舞います。

狂言「柿山伏」(かきやまぶし)

大峰山・葛城山での修行を済ませ出羽の羽黒山へ戻る途中の山伏が、おなかを空かせて見つけた柿の木に登つて柿を食べ始めてやろうと鳥だ、猿だと言つて、山伏はその鳴き声を真似して、その気になつた山伏は木から落ち、腰を打つてしまいました。山伏は看病せよと言いますが、柿は断るので、法力を見せよう

能「小督」(ことく)

高倉天皇の寵愛を受けていた小督局は清盛の怒りを知り、密かに身を隠してしまいます。天皇は嘆き悲しんで、小督が嵯峨野の辺りにいる家という家を知り、仲国に捜し出すが、秋の名月、何度も小督の琴の相手が笛を掛けたこと、折しも中は、名月に向つて小督が奏でるであろう音色を頼りに、嵯峨野に馬を走らせ、やつとそれらしい家を探し出して、案内を請うると去つて行きます。

能「玉葛」(たまかづら)

長谷寺に参詣する僧が初瀬にさしかかると、川舟を操る女性を通りかかります。女は、僧を二本杉に案内し、源氏物語の中で、玉葛が母の夕顔の死後、九州に下つて乳母に育てられていたが、都に上つてこの二本杉で母の侍女であつた右近に会ひ、光源氏に引き取られることとなつた事を語りませす。そして自分こそ玉葛の霊と名乗り、用ひを消えさせます。後半、弔いの内に玉葛は狂乱の体で現れ、我が身に降りかかつた男たちの妄執の苦しさを語りませす。

狂言「飛越」(とびこえ)

何某に誘われ茶の湯に行く新発意(修行中の若い僧)。途中でちよつとした小川を飛び越える場所にはさしかかり、何某は簡単に飛び越えますが、臆病な新発意は中々飛び越えられせん。何某が手を取つて飛び越そうとしますが、川へはまられてしまいます。これを見て何某が大笑いしますが、新発意は何某が過去に相撲で小男に投げ飛ばされた話をして大笑い。怒つた何某は相撲を取らうと言ひ出しますが、さてその結末は……

能「黒塚」(くろづか)

那智の東光坊の祐慶と連れは、陸奥安達原で行き暮れてしまひ、僅かな火の光を頼りに一人の老女の住む家を訪ねると宿は「わくかせ輪」と答へて糸を紡ぎながら自らの生涯を嘆きます。なんとなく不気味な女は夜寒に薪を採りに山に行くが、留守に闇を覗くと言ひ、禁を破つた能力が闇を覗いてしまひ、祐慶達も恐ろしくなつて逃げ出すと、裏切られた哀しみに鬼となつた女が追いかけて来ます。女の業と悲しみを描く秋の名

枕 慈童

ワキ 梅村 昌功

大鼓 大倉栄太郎
小鼓 野中正和

太鼓 藤田雄一郎
笛 藤田貴寛

後見 宝生 和英

水上 飛能
内藤 和磨

地謡

上野 能寛
木谷 哲也
金森 良充
亀井 雄二

藤井 晴雅
前田 啓之
武田 孝史
小倉 健太郎

柿山伏

若松 隆

山本 則孝

〓 休憩十分

小 督

侍女 朝倉 大輔
局 金森 隆晋
辰巳 大二郎

ワキ 野口 琢弘

間 山本泰太郎

大鼓 飯富 良太郎
小鼓 飯富 孔明

笛 栗林 祐輔

後見 朝倉 俊樹

野月 尚史
東川 尚史

地謡

川野 隆十
内藤 弘宜
澤田 飛能
宏司 司

金野 秀祥
佐野 由行
今井 泰行
辰巳 満次郎

〓 休憩十分

玉 葛

シテ 今井 基

ワキ 福王 和幸

間 山本 則秀

大鼓 大倉慶乃助
小鼓 住駒 匡彦

笛 寺井 義明

後見 小林与志郎

大友 順

地謡

金野 賢郎
金井 泰大郎
藪野 克徳
高橋 憲正

金井 雄資
田崎 隆三
大坪 喜美
渡邊 茂人

〓 休憩十分

飛 越

山本泰太郎

山本 則秀

黒 塚

シテ 小倉伸二郎

ワキ 則久 英志

間 山本 則孝

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 田邊 恭資

太鼓 金春 國直
笛 熊本 俊太郎

後見 高橋 亘

小林 晋也

地謡

辰巳 和磨
田崎 和磨
富山 淳甫
佐野 玄宜

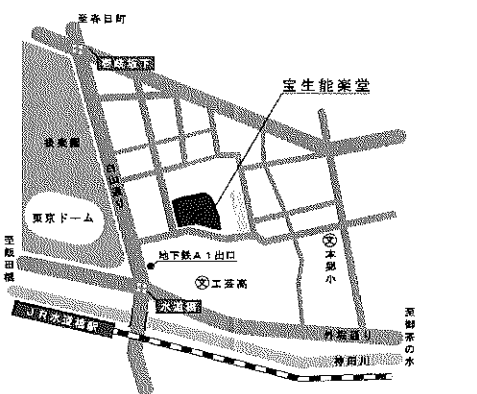
山内 崇生
東川 光夫
佐野 光夫
和久 荘太郎

(終演予定 午後五時十五分頃)

次回予告

平成二十九年十一月十八日(土) 正午(始)

殺生石山内 崇生	葛城 佐野 弘宜	松虫 和久 荘太郎	威陽宮 金井 雄資
----------	----------	-----------	-----------



◎入場料 一般 / 5,000円
学生 / 2,500円

◎会場 宝生能楽堂
JR水道橋駅東口 徒歩3分
都営地下鉄三田線 水道橋駅 A1出口 徒歩1分

☎113-0033
東京都文京区本郷1-5-9

宝生会 月並能

平成二十九年十月八日(日)
午後二時始

演目の解説

梅枝
シテ辰巳満次郎

ワキ殿田 謙吉

大鼓 佃 良勝
小鼓 曾和 正博

笛 小野寺竜一

能「梅枝」(うめがえ)
身延山の僧達は、行脚の途中津の国住吉でにわか雨に会い、宿を借りようと一軒の粗末な家に声を掛けます。主の女が僧達を請じ入れると、そこには舞楽の衣装と太鼓が飾られており、女は昔内裏に管弦の役を争い破れて討たれてしまった夫の話をします。なおも不審に思う僧にむかい、回向を頼んで女は消えてしまいましたが、その夜半、舞楽の衣装をまとった女の霊が現れ、様々の舞楽を舞って夫への思慕を訴えます。同じ題材で現在能の「富士太鼓」のシテを幽霊にし、色々の舞楽を強調した曲となりました。

次回予告
平成二十九年十一月十二日(日)
午後二時始

熊坂	楊貴妃
床几之形	亀井 保雄
前田 晴啓	

15:30

伯母ケ酒

山本 則俊

若松 隆

〜 休憩 十五分 〜

16:15

大江山

シテ今井 泰行

ワキ大日方 寛

大鼓 亀井 実
小鼓 住駒 幸英

太鼓 徳田 宗久
笛 内潟 慶三

(終演予定 午後五時二十五分頃)

後見

宝生 和英
前田 晴啓
野月 聡
澤田 宏司

地謡

高橋 憲正
小林 晋也
小倉健太郎
高橋 亘

金井 雄資
田崎 隆三
中村孝太郎
佐野 登

間 山本 則重
" 山本 則秀

狂言「伯母ケ酒」(おぼがさけ)
酒を造つて商売をする伯母は、殊の外しわい(ケチ)人で、一度も酒を飲ませてくれません。今日こそ酒を飲もうと出かけた甥は、近所で売るのできき酒をさせると言うものの、あつさりとならされてしまいます。何とか飲もうと、この間近所に鬼が出たので店を早く閉めたほうがいいと、忠告して帰ります。甥は鬼の面をつけてなりすまし、伯母を脅してまんと酒蔵へ行くと、酒をたくさん飲んで酔つ払つて寝てしまいます。さて...

能「大江山」(おおえやま)
源頼光とその一行は、帝の命を受け酒呑童子という鬼を退治するために、大江山深く分け入り、途中で出会つた洗濯女の手引きで館に宿を求めます。酒呑童子は出家には手を出さない約束があつて、童子そのままの姿で頼光達に對面し、大江山に来ることとなつた次第を語り、酒を勧め自らも呑み、大いに酔つて油断して寝所に入つてしまいます。頼光達が寝所に攻め込むと童子は鬼の本体を現し、恐ろしい姿で戦いますが、ついに退治されてしまいます。

◎会場 宝生能楽堂
◎入場料
S席 正面 / 8,000円 A席 正面 / 7,000円
B席 脇正面 / 6,000円 C席 中正面 / 5,000円
D席 自由席 / 3,000円
学生割引 全席種1,000割引 ※30歳未満の学生の方
◎チケットお申込先
宝生能楽堂 03-3811-4843 10時~17時(月曜休館)
<http://www.hosho.or.jp>
カンフェティ 0120-240-540 平日10~18時
<http://confetti-web.com>